



私の看護の基礎を教えてくださいました人

【岐阜県】越前崇子^{こしまえ たかこ} 43歳

看護学生時代の病院実習の中で
も小児看護は子ども相手にどう接
していいのか、親との関わりなど不
安が大きかった。しかし、いやんな
しに小児看護の病院実習が始まった。

実習先の小児専門病院へ行き、小
学5年生の白血病・骨髄移植後の
女の子を学生指導者から紹介され
た。その女の子は慣れた口調で「何
聞きたい？ 大体知ってるでしょ」と
話し掛けてきた。そうだ、彼女は私
の通う学校の学生の担当を請け負っ
てきた女の子である。私は戸惑った。
そして正直に伝えた。「あなたとで
きるだけ同じことをしてみる」
翌日から、彼女の日常を私の生
活に可能な限り取り入れた。主治
医と学生指導者の許可の下、私も

吸入を行い、ミルトン消毒された食
器にお弁当を盛りつけ直して食べ
て、マスクを常時2枚装着した。院
内学級と同じように、時間割りを
作成して行動した。

そんな私を見て、彼女が「結構
やるじゃん」とにやりと笑った。白
血病で骨髄移植を受け再発のため
入院していた男の子を見ながら、
「私も、再発するのかな」と彼女は
つぶやいた。彼女の横顔は、恐怖と
共存している生活を教えてくれた。
実習終了後、彼女から文通がし
たいと申し出があり、手紙のやり
取りが始まった。看護師になった私
は小児科病棟勤務を希望した。彼
女に報告すると「結構やるじゃん」
と返事がきた。にやりと笑う彼女

の顔が目には浮かんだ。手紙で彼女
の成長する様子や、時々体調を崩
しながらも再発していないことを知
ることができた。近況を報告しな
がら彼女が大学を卒業するころに

は、やりとりは季節のあいさつ程度
になった。それでも彼女の無事を知
れることはうれしかった。気付けば
20年以上の月日が流れていた。
今年の秋の終わり、喪中はがき
が届いた。亡くなった方の名前が彼
女の名前だった。
「患者の立場になって考える」。
私の大切な看護の基礎を伝えてく
れた大切な人が亡くなった。これ
からも看護の基礎を大切に看護
師を続けていくと彼女にもう一度
伝えたい。